

大沢在昌

らんぼう



新潮
エンターテインメント
倶楽部

大沢在昌

新潮社



らんぼう

1998年9月20日発行

【著 者】 おおさわありまさ 大沢在昌

【発行者】 佐藤隆信

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71 振替00140-5-808

【電話】 編集部03-3266-5411 読者係03-3266-5111

【印刷所】 大日本印刷株式会社

【製本所】 大日製本印刷株式会社

© Arimasa Osawa 1998, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-602640-6 C0393

価格はカバーに表示してあります。

❖らんぼう❖
目次❖

ちきこん

ぴーひゃらら

がんがらがん

ほろほろり

ころころり

おっとつと

しとしとり

てんてんてん

あちこちら

ばらばらり

5

29

75

113

137

167

203

235

265

295

らんぽう

ちきこん

人間、あまりにびつたりの名前をもっていると、誰も名前では呼んでくれなくなることがある。

大浦がそうだ。とにかく大きい。身長が一八五センチあって、体重が百キロ。高校時代はずっと柔道をやっていて、もう少しで県の代表選手としてインターハイにでられるところまでいった。いや、本当はでられていた。でられなかったのは、予選の前日、街の喧嘩で相手のアバラを折ってしまったからだ。大男には気の長い人間が多いというが、大浦はちがう。すぐかっとなる。社会人になった今は、だいぶおさまってきたが、それでもかっとなると手がつけられない。周りの人間は「ウラ」と彼のことを呼んでいる。

その晩、ウラといっしょにいたのは、赤池、通称「イケ」だった。ウラより二十センチも身長が低いくせに、イケも喧嘩早い。名前の通り、すぐまっ赤になる。ウラとイケはコンビだが、「史上最悪のコンビ」「最も狂暴なコンビ」と周囲にはいわれている。「おかしい二人」といわれることはない。

二人は今、「デイ・バイ・デイ」というコンビニエンスストアにいた。青いストライプの入った

上っ張りを着ている。ウラに合う上っ張りは「デイ・バイ・デイ」の管理本部が急遽^{きゆうきよ}アメリカからとりよせたものだ。「デイ・バイ・デイ」は、「セブンイレブン」と同じでアメリカからやってきた、コンビニエンスストアのチェーンだった。後発なので、都内でもまだ数は少なく、立地条件も恵まれていない。

二人がいる店は、昔は工場地帯だったのが、地下鉄の整備で急激にアパートやマンションの増えた埋立て地域にあった。持主が夜逃げした工場やぼろぼろの倉庫が、ま新しいマンションなどと背中合わせに建っている。昔から東京に住む人々には、「ガラの悪い」地区だと思われていた。事実、暴走族も都内にしては珍しく残っていたし、ひったくりや痴漢も多い。それに何より、二人のいる「デイ・バイ・デイ」が、半年間に五回も強盗に入られていることが証明していた。しかもそのうちの四回は同じ犯人（らしい）なのだ。

「お前、でてくるなよ」

カウンターの中にいたイケがウラにいった。十時を過ぎると、店の周囲はまっ暗になる。「デイ・バイ・デイ」の中だけが煌々^{こうたう}と明るい。右隣には広い駐車場があり、左隣は倉庫だ。地下鉄の駅からも少し離れていて、向かいには成績が悪化して閉鎖された工場があった。元は弁当屋だった店のオーナーは、その工員寮が近くに建ちそうだという噂をあてこんだのだ。

「裏は暑く苦しいんだよ。それに段ボールがやたら積んであって狭いし——」

「お前がいると客がこねえんだ。さっさとこんな仕事終わらせようぜ」

「くそっ」

ウラは唸^{うな}った。

「土曜日だつたうのについてねえよ」

「その辺にあるエロ雑誌でももってって、センズリこいてろよ」

イケが入ってすぐ左手にある本棚を指さしたとき、ガラスの自動扉が開いた。ジャージの上下を着た、色の白い少年が入ってくる。夏なのに、冬物のような厚い生地のジャージだった。スイング式の奥の開閉ドアの前に立つウラに気づくと、驚いたように目を丸くした。

「いらっしやいませ」

イケがいい、ウラも、

「いらっしやいませ」

と太い声をあげた。少年は首をすくめた。今にも外へ逃げだしそうだった。イケはウラに首をふって見せた。ウラはしぶしぶ、スイングドアの奥に消えた。

少年はまだおどおどしていた。イケの方を見やり、目が合うと下を向いた。やがておずおずと、奥の大型冷蔵庫に歩みよった。店内は冷房がきいていたが、その晩は特にむし暑かった。少年がガラス扉を開くと、冷蔵庫のモーターは一段と唸りをあげ、扉はまっ白に曇った。

少年はガラス製の小壇に入った清涼飲料水を四本選び、もう一本をとりうとして床に落とした。壇は割れなかったが、あわてた少年が片手をのばしたため、さらに二本が床に落ちた。

「カゴ、使いますか」

イケは声をかけた。少年は無言で首をふった。ようやく五本を胸に抱くと、カウンターまでやってきた。カウンターに壇をおき、イケがレジスターのバーコード読みとり器を手に行っているあいだ

に、今度は弁当の並んだ冷蔵庫の前に歩みよった。

たっぷり五分は悩んだ。

結局、チキンカツ弁当を手にカウンターに戻ってきた。

「弁当あっためます？」

少年はまた首をふった。イケは弁当のバーコードを読みとった。

「一〇七六円です」

少年が不意に目をみひらいた。くるりと踵を返し、大型冷蔵庫に走っていく。緑茶の缶をとりだした。

「一一八六円です」

イケは怒鳴りつけたいのをこらえていった。こういう愚図がいちばん頭にくる。少年はジャージのヒップポケットから黒革の小銭入れをだし、折り畳んだ千円札を一枚だし、コインを搜した。結局コインは見つからず、もう一枚の千円札がでてくるまで、イケは爪先で小刻みに床を蹴っていた。

またチキコンが鳴っている。理由はわかっていた。トルエンが切れたからだ。ビニール袋の中のティッシュはすっかり乾いて、もう全然匂わない。昼前からやっていたので、いつもだったら、もう充分なのに、今日はちがう。チキコンの日だからだ。

チキコン、チキコン、チキコンコン。

チキコン、チキコン、チキコンコン。

ずっと同じリズムが頭の中で鳴っている。こんな日は、吐くまでやらなきヤリズムが止まない。

チキコンの日がくるようになったのは半年くらい前からだ。

オサムは部屋の中を見回した。空になったドリンク剤の壺が三本。咳止めシロップの箱が目に入つて、涎をすすりながら手をのびしたが、空っぽだった。

くそ。やんなつちまう。チキコン、チキコン、チキコンコン。

超いらつく。チキコン、チキコン。

金がないのはわかつてる。くそ婆あは、金という金をもつて、今日は親戚ん家だ。朦朧とした目で時計を見る。十時二十分。売人の関さんは、十二時までなら自動車電話でつかまえられる。特価一本二千元。チキコンを消すには、あと六千元はいる。

チキコン、チキコン、チキコンコン。

畜生、やるつきやねえ。やるつきやねえったら、やるつきやねえ。

チキコングッズはどこだつけ。あつたあつた。前にサトシが置いてつた、狼男のマスク。あとは下の台所だ。

どうする？ チキコン、チキコン。

「てめ、なめんじゃねえぞ！ 殺すぞ！ この野郎！」

巾よせしてきたソアラに巾よせしかえして、松が怒鳴ると、茂も横から叫んだ。

「オラア！ なんだあ、お前は！」

「やっちまえやっちまえ」

後部席の達がいう。

「おし！」

松は急ハンドルを切って、ソアラの鼻先を押さえた。ソアラは急ブレーキを踏んだ。達はふり返り、

「習志野だぜ、馬鹿たれがあ」

ソアラのナンバープレートを読んだ。

三人はほぼ同時に車をとびだした。まず松が助手席のドアに蹴りを入れる。

「おらあ！ 降りてこい、この野郎！」

「てめ、どこのチームだ、こらあ」

茂もいった。ソアラは、額に剃りを入れたガキがひとりだ。

「連合なめてんのか！ この野郎は」

達もいう。連合の名を聞いて、ガキの顔色がかわった。遅えんだ、馬鹿が——茂は腹で嗤って、もって降りた鉄パイプをソアラのフロントグラスに叩きつけた。先週、バイト先の現場でちょうどいいのを見つけたのだ。ビニールテープを巻いて、握りをよくしてある。

「せーの！」

一撃でまっ白になり、ガキは両腕で顔をかばった。

「おらあ、でろよ！ こら」

達がボンネットにとび乗った。いつもはいている安全靴でフロントグラスを蹴る。ぐんにやりとフロントグラスは内側にたれさがった。

「勘弁して下さーい」

ガキが泣き声をあげた。

「るせえ！ この野郎」

茂はいつて、今度はサイドウィンドウにパイプを叩きつけた。割れた窓からロックを外し、ドアを開けてガキをひきずりだす。

「おし！」

松がいつて、一発目の蹴りを入れた。

「殺そかあ」

茂は鉄パイプで肩をこづいた。ガキは鼻血と涙で顔をくしゃくしゃにしながら土下座した。

「勘弁して下さい。先輩、勘弁して下さい」

「遅えんだよ、田舎もん！」

「ぶっ殺す！」

きっぱりと達がいう。安全靴で顔を蹴った。とんだ白いカケラは歯だった。

「決まったあ」

達はボーズをつけた。茂はパイプを肩にのせ、腕時計を見た。十一時まであと三十分ある。こいつにたつぷり焼きいれても、集会には間にあう筈だ。

今日遅れるのはちよつとマズい。OBの関さんがくるからだ。

「あらよつと！」

達がソアラの屋根の上でとびはねた。

今日は土曜だ。土曜はいつも、あの眼鏡をかけた店員がいる筈だった。何だ、今日の連中は。新しいバイトだろうか。

和巳は枯れてしまったアロエの鉢に買ってきたサイダーの壺の中身をあけながら考えていた。五本全部を空にすると鉢から溢れたサイダーがベランダを濡らしていることに気づき、はっとした。ママに叱られるかな。

大丈夫だ。ママは今日は遅いって言ってたから。土曜日はパパが帰ってこないのを知ってるから、きつとデートなんだ。今度の彼氏は、家庭教師の川村先生だ。川村先生は大学でラグビーやってるっていつてた。だからいつも汗くさい。

ママはよく、あんな汗くさい奴とセックスができるな。

パパの彼女はどんなのか知らないけど、きつとまた頭の悪そうなホステスなんだろう。このあいだもママはパパにいつてた。工場閉めなきゃなんないくらい景気が悪いのに、なにやってんのって。フィリピン女なんか金つかってって。

まあいいや。

問題はあいつらだ。今日こそあいつらをぎゃふんといわせてやる。暴走族の不良たち。

あいつらがいつもコンビニの駐車場にたまるおかげで、うるさくて勉強ができやしない。この前中間テストで成績が落ちたのもあいつらのせいだ。

なのにママは、約束のゲームソフトを買ってくれなかった。クラスの連中は皆んな持つてる。ただでさえ馬鹿にされてるのに、これ以上話についていけなかったら、「虫」にされてしまう。

最初に「虫」にされたのは確か井上だった。井上ん家はホカ弁屋で、いつも店の売れ残りを食っ

てるって誰かがいいだして、それで井上が「虫」にされることが決定したのだ。「虫」になると悲惨だ。「私は虫です」って毎回いわないと、会話の仲間に入れてもらえない。井上は泣いて頼んだけどやっぱり駄目だった。結局、井上が「虫」から解放されたのは、転校してきた中村が、変な名古屋弁を使うんで、二代目の「虫」に決定したからだ。でも中村はけっこう強いんで、皆んな「虫」を別な奴にした方がいいなって思ってる。

ヤバいな。超ヤバいな。これじゃ僕が「虫」になるのも時間の問題だ。

だからあいつらをやつつける。

計画はばっちりだ。閉めた工場の鍵は、パパの机のひきだしから見つけた。工場の屋上にあがれば、コンビニの駐車場は、道路をはさんでま下だ。屋上には囲いがあるから、隠れていればあいつからは見えない。

車庫にあったポリタンクから抜いてきたガソリンをサイダーの壺に詰める。

あとはペーパータオルをねじこむだけだ。

あいつらがくるのはどうせ十二時くらいからだ。仕度ができたら、「ドラゴンファンタジー」でもやって待つてよう。

あいつらがくれば、バリバリいうエンジンの音ですぐわかる。

「はいっ、その件に関しては必ず本部に知らせますから……いえ、そんな。自分はそんな、ひとりおいしい思いをしようなんて、絶対に考えてません。はいっ。はいっ。じゃ、失礼します！ 御苦勞さまでした！」